



礼



礼とは、関係がほどけたあとに残る気配である。

礼は、感謝の言葉ではない。  
丁寧な表現でも、正しい作法でもない。  
人の前に立っているあいだに示されるものですらない。

礼が現れるのは、  
役目が終わり、関係がほどけた、そのあとだ。

用がなくなった瞬間、  
もう何も得るものがなくなった瞬間。

そのとき、人は何も持たずにそこに立つ。

そのあとに残るものがある。

返事をするのが、礼なのではない。  
沈黙することが、即座に無礼でもない。

形式的な言葉はいくらでも用意できる。  
感謝も、労いも、正しさも、簡単に装える。

だが、礼は言葉では成立しない。  
準備された振る舞いは、礼に似た別の何かにすぎない。

礼は、演じるものではなく、  
残ってしまうものだからだ。

もう何も返す必要がないところで、  
人は、そのまま出る。

返さない、という選択。  
応じない、という軽さ。

それらと、  
同じ形をしていないものがある。

そこには、理由も意図も置かれない。

ただ、途切れずに続いてしまう所作がある。

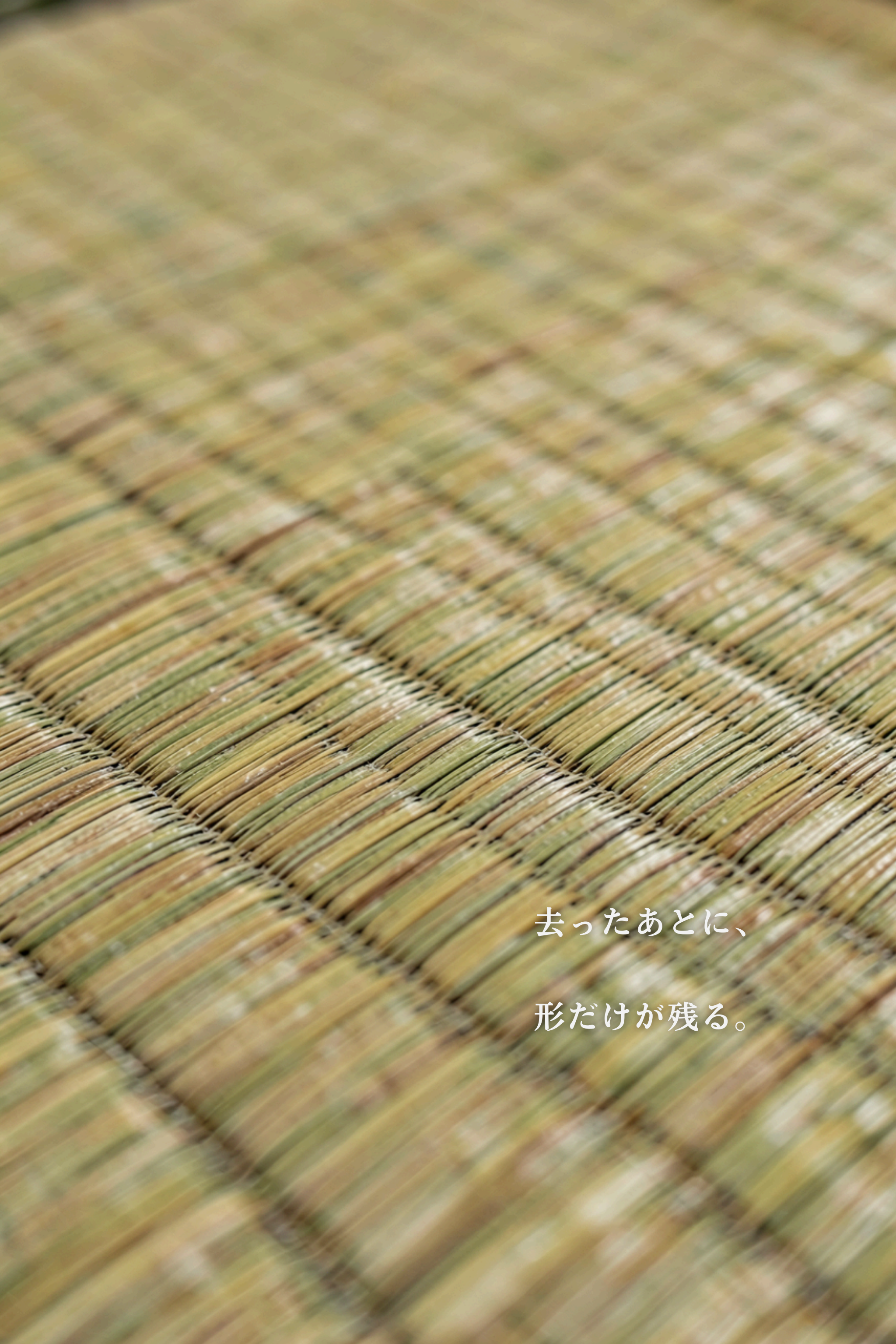
それは、誰かのためでも、  
自分のためでもない。

残ったものが、  
そのままそこにあるだけだ。

だから、礼は教えられない。  
指摘もできない。

振り返られない背中にだけ、  
それは静かに残る。





去ったあとに、  
形だけが残る。







Edition — 存在の芯  
別景：礼

著者：美学思想家 古川玲奈  
発行：Raffiné  
2026